〈第2部〉14:10～ パネルディスカッション

「父親の育児参加がもたらすもの」
～現代の父親らしさって何？～

［コーディネーター］　静岡文化芸術大学文化政策学部 教授：勝浦範子氏
［パネリスト］　NPO法人 ファザーリング・ジャパン：藤森新五氏 ／ ジヤトコ株式会社：田中正史氏
NPO法人 新座子育てネットワーク代表理事：坂本純子氏 ／ 俳優・タレント：金子貴俊氏

司会： 第2部のパネルディスカッションに移らせていただきたいと思います。本日のパネルディスカッションでは特に父親の子育て、子育て支援にかかわっている方々をお呼びしております。パネリストの方々のさまざまな経験談などをお伺いしながら、みなさんには子育てのヒントを何かひとつでもお持ち帰りいただければと思っております。では早速ではございますがパネルディスカッションにご参加いただく皆様をお呼びいたします。

まずはじめに、本日のパネルディスカッションのコーディネーターをつとめていただきます、静岡文化芸術大学勝浦範子教授をお呼びしたいと思います。勝浦教授は、現在静岡文化芸術大学の文化政策学部国際文化学科で教鞭をとられております。勝浦教授、本日はよろしくお願いいたします。

続きましてパネリストのみなさんをお呼びいたします。

お一人目はNPO法人「ファザーリング・ジャパン」の藤森新五さんです。藤森さんは静岡県のご出身で、電気通信関連メーカーに勤務されながら、「ファザーリング・ジャパン」で父親であることを楽しむことの理解、浸透のためにさまざまな父親支援事業に取り組まれております。

そして、パネリスト二人目はジヤトコ株式会社、田中正史さんです。田中さんは富士市に本社を持つ自動車部品の開発製造企業、ジヤトコ株式会社にお勤めです。ジヤトコ株式会社は社員が子育てと仕事を両立し、働きやすい環境をつくるための行動計画を発表するなど、子育て支援にも積極的に取り組まれております。田中さんは現在人事のご担当をされていらっしゃいます。

続きまして、NPO法人「新座子育てネットワーク」代表の坂本純子さんです。坂本さんは大阪府のご出身で、広告会社での勤務などを経て、現在は平成11年に発足された新座子育てネットワークで代表をつとめていらっしゃいます。「新座子育てネットワーク」はコミュニティーセンター活動から生まれた、子育ての当事者が中心となったネットワークです。父親たちが職場や地域などでその役割について学び、仕事と子育てについて考えるために開発されたお父さん応援プログラムは、多くの企業や自治体などで取り入れられております。

そして四人目は先程トークショーで登場いただきました金子貴俊さんです。金子さんは先程のお話をふまえてご参加いただきたいと思います。それではどうぞよろしくお願いいたします。

勝浦： その前に、会場にお子さん連れの方がいらっしゃると思うんですけど、お子さんが会場を走り回るのはよろしいってことですね。遠慮なさらずに走り回らせながら聞いていただけたらと思います。壇上もよろしいんですね。壇上に上がってきましたらパネリストのお父さんたちはみんな子どもの扱いが上手なので、是非遠慮なさらないでいただきたいと思います。それでは、まず簡単に皆様方から自己紹介をしていただきます。では、藤森さんから、お願いいたします。

静岡文化芸術大学文化政策学部 教授　勝浦範子氏

藤森： NPO法人の「ファザーリング・ジャパン」の藤森と申します。ファザーリングってあまり聞きなれないかもしれませんが、いい父親じゃなくて笑っている父親を目指してます。「ファザーリング・ジャパン」の安藤さんっていう代表がいまして、けっこうマスコミとかにも出ててご存知の方もいらっしゃるかもしれませんけど、そういう父親を楽しもうっていうことでやってます。会場の子どもさんと保護者の皆さん。長い時間ですので、お子さんが声を上げても全然OKですからね。そのへんを這っていても大丈夫ですので、皆さんで良い時間をすごしたいなと思います。

田中： みなさんこんにちは。静岡県の富士市に本社があります、ジヤトコ株式会社の人事部に所属しております田中と申します。今日、私はここで参加させていただいた理由は二つあります。ひとつは、会社の人事担当として男性の育児参加が会社にどんなメリットをもたらすのかという会社的な立場としての話がひとつ。もうひとつが、実際私は2年半前に子どもが生まれたときに育児休職を取りました。弊社では初めてでした。その育児休職を自分がとったという体験談的な、個人的なお話もあわせてできればというのが二つ目になります。今日はよろしくお願いいたします。

坂本： 埼玉県の新座市から来ました、「新座子育てネットワーク」というNPOを主宰しております坂本純子と申します。うちには中3の思春期がちょっと抜け始めたかなぁっていう男の子が一人おります。なかなか思春期って異性の親にとっては大変だと思う日々でございました。小さい頃の子育てが、やっぱりつながってると思わされることもたくさんあります。お父さんと一緒にがんばって、子育てのスタートを切っていただくのに多少お役に立つお話ができればと思っております。

勝浦： それでは、金子さんは先程からお話伺っておりますので、ちょっとパスさせていただいて、坂本さんのお話をいただきたいと思います。

坂本： 今日のパネリストはお父さんが3人と先生が1人、私はお母さん代表ということで、お母さんの実態をお話くださいとリクエストをいただいております。主宰するNPOでは、地域で子育て支援センターや児童館を運営しております。その中で乳幼児期の子育てのはじまったばかりのお母さんたちと普段から接しています。それから最近は、お父さんのための研修のプログラム、お父さん応援プログラムというのを開発して、全国の30くらいの自治体に出向いて、地元の方たちと一緒にお父さん支援をしています。その中でお母さんから聞く声は、やっぱり「お父さんが疲れている」「時間が取れない」「子どもの寝顔を見てただいま、寝顔に行ってきますって言っている」。そんな状況が共通して聞かれます。

いろんなお仕事の関係で、シフト制で24時間交代で働いていらっしゃったり、あと土日の勤務もローテーションで回ってきたり、共通してお父さんが、家庭で過ごす時間がほんとにわずかしかない。そして、心も体も疲れている状況がお母さんからよく聞かれます。もうちょっと育児を手伝ってほしいとか、ああいうことをしてほしいとか言いたいんだけど、言うのもはばかられるような疲れ方をお父さんがしている。これは全国どこでも聞かれることです。うちの地元の新座でも郊外のベットタウンですから、本当に働き蜂のように働かされているお父さんたちがたくさんいらっしゃって、お母さんはそのことを心配していらっしゃいます。

それと最近とくに顕著なのは、夫から「保育園を探したら」とか、「いつから働きに行くのか」と、働くことを求められるお母さんがすごく増えてます。10年位前だと、幼稚園に上がってから小学校のことがちらちら見え始めてから働く話が夫婦の間で出始めるようでしたけども、最近はやっぱり不況だとか、経済の伸び悩みというようなことがあります。これからの家族は、働くことも夫婦で力をあわせて、家のことも力をあわせてという時代になってきている。これはすごく大きな変化かなと思います。

すごく嬉しいところでは、「イクメン」という言葉が流行語大賞にノミネートされたりして、「子育ては面白そう」とか、「しなきゃいけないかなぁ」とか、「したいなぁ」という30代半ばくらいのお父さんがすごく増えている。ですので、お父さんを上手に子育てのパートナーにしていったお母さんからは、「意外とうちのパパ、子どもの扱い方がうまいのよね」っていう声も聞かれたりします。

うちの息子が生まれた10数年前には、保育園にお迎えに行くお父さんがちらちらいるくらいでしたけど、いまは保育園の朝の登園風景を見ると、時にはお父さんの方が多いくらい。ですから、世代としてはお父さんもお母さんも子育てするように、だんだんと変わってきています。その点は私は可能性を感じてうれしいところです。

ただ一方で、お父さんの支援プログラムを職場や地域の子育て支援センターでやったりすると、お父さんたちは子育てをもっとしたいんだけど、どう手を出していいかわからないと言います。週末に疲れきっていても、一生懸命どこかイベントへ連れて行ったりするんだけど、なかなか妻は喜んでくれない。ただ、お父さんによっては、やっぱり妻が子育てをするものだって思い込みのある方もまだまだたくさんいらっしゃる。今のお父さんたちは、新しいお父さん像をつくる最初の世代、開拓者の世代になっていると実感しています。

では、おじいちゃん、おばあちゃんたちはどうなのかというと、孫は目に入れても痛くないほどかわいらしいので、どこのおじいちゃん、おばあちゃんたちも子育てをサポートしていらっしゃると思います。でもご自身たち男性は育児や家事を率先してやることを時代として共有してこられなかったので、どう応援していっていいのかわからないという戸惑いもおありになるようです。どうしても、母親が子どもには一番っていうような思いで、かわいい孫にしっかりとお母さんが向き合えって言ってきたりするおばあちゃんもまだまだいらっしゃいます。

一方で、変化を感じてらっしゃるおじいちゃん、おばあちゃんなんかは、これからの父親は子育てもしてくれなければいけないんだと言います。それは大体が娘さんがいらっしゃって、お婿さんに対して言うおじいちゃんが多いですね。自分はやってこなかったけども、これからの父親は子育てもやらにゃいかん、みたいなことを、娘かわいい、孫かわいいといったところで言ってくださる。そういう人たちは大いに私たちも味方にしてたりするわけです。さまざまな家族観が混在している時代ですが、でも確実に夫婦が力をあわせて子どもを育てて家計を運営していく時代に突入しているのを感じます。

すごく大きなプレッシャーは、お父さんが経済的な力をお母さんに求め始めたのと同じように、やはり社会も共働きじゃないとなかなか生き抜けない時代になってきていると思います。父親の子育てをみんなで盛り上げていきましょうって話しをしたときにいつも申し上げるんですけども、これからは社会の変化にうまく適応していける家族と、適応できない家族で運命が別れていくと思います。ですからご夫婦で子育てのことだけじゃなくて、お母さんも社会で自分の能力を発揮すること、社会的な活動みたいなことも、ちょっとお話し合いをしてみるのが大切かなと思ったりもしています。

勝浦： ここに会場のみなさんに書いていただいた質問がございます。これから30分間パネラーの皆様にいろいろ話し合いをしていただくんですけども、これを反映させたいと思います。すごくいい質問が沢山きていてわくわくしてきますね。パネラーの皆さん、よろしいですか。では金子さん、「子育ては父親が参加するものなのでしょうか？」

金子： はい、参加するものです。

勝浦： これを書いた方、今のお答えで満足ですか？ちょっと違いますよね。ここにいる男性の皆さんはすばらしい父親なんだけど、それでもギャップがあるの。藤森さんは意味わかったみたいですね。

藤森： 少しわかりました。結局、参加とかね、よくいうんだけど、妻があげるNGワードのナンバーワンって「なんか手伝おうか？」ってやつなんですよ。で、「手伝おうか」って言った瞬間に、もうひと事なんですよ。メインはお前だろ、妻でしょって、その時点で妻はキレちゃう。だから参加じゃない。

勝浦： そうなんです。ごめんなさい、金子さん。実はここにいらっしゃる父親のお三方とも実は奥さんが働いてないんですよ。もちろん育児というお忙しいことをなさってるけど、いわゆる外で働いてないんです。もし奥様が外で働いていたら、今日はこられなかったんじゃないか。そのくらい忙しいということなんです。それから金子さん、先ほどの講演で「してあげる」とおっしゃってたんですよ。たぶん私も、質問した方も、「あげる」って聞くたびに文句を言いたくなってしまう。言葉を変えるにはどう働きかけたらいいのでしょうか。「やってあげる」じゃなくて、本当に「シェアするんだ」って意識はどこから出るんだろうか。これはすごく大きなテーマなので、これはとりあえず置いておきます。今回のテーマは子育てにおいて父親として実践していることで、失敗談を語るというアンケートがございます。では失敗談を語ってくださるという勇気のあるお父様、いらっしゃいますでしょうか。

藤森： 失敗談というかですね、自分も上の子が10歳で、下の双子の女の子が6歳、3人の子どもを持っているんですけど。僕、結構いろいろ中学高校くらいまで手伝いやらされたので、家のことやるのは全然気にならないんですね。洗濯物、ママのパンツとか、子どものパンツ干すのも全然気にならないし、家事とかも全然気にならないんですよ。ただ、自分が一生懸命目いっぱいやってたんですよ。どうなったかっていうと、自分が目いっぱいやっちゃってるので、ちょっとしたことでこっちがキレちゃうんですね。ママは